

## 7. 曾祢っ子たちの日々～昭和初期を中心に～

中 林 悦 子

- I はじめに
- II 御祖地区における曾祢
- III 子供たちのくらし
- IV 考 察
- V おわりに

### I は じ め に

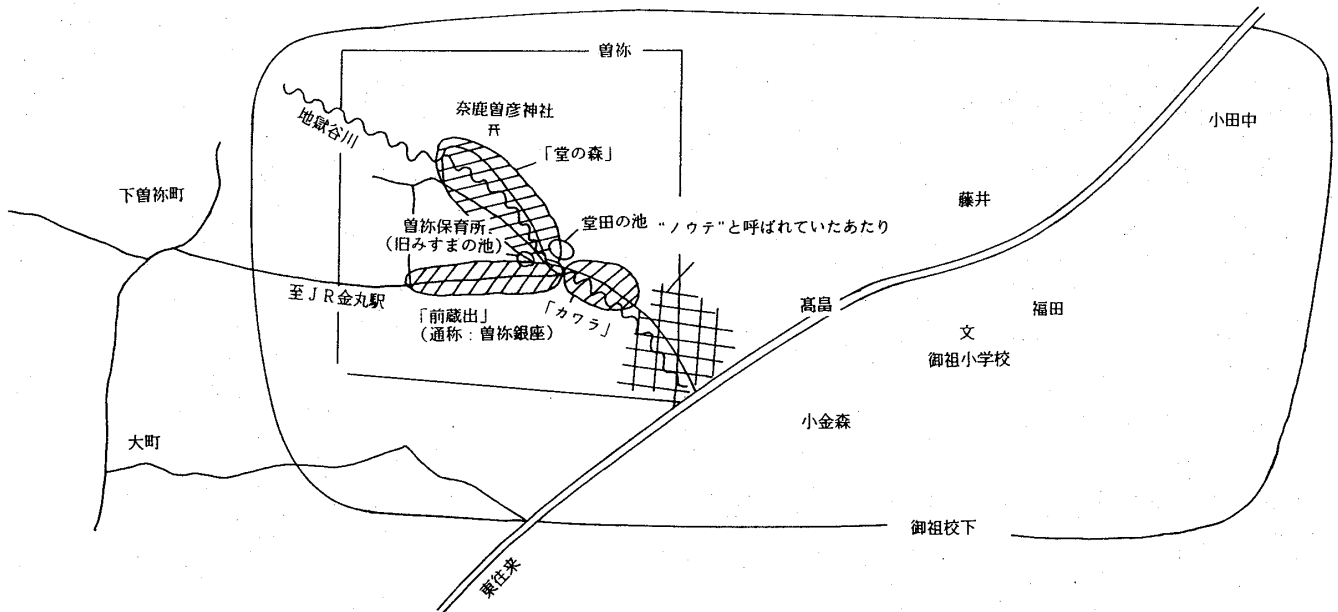
第1章でも触れられた通り、曾祢には全国平均を上回る割合の高齢の人々が元気に過ごしている。調査中、主にこうした高齢の人々から、「曾祢は昔貧乏でね」とか「曾祢は団結力のある地区や」といったことがよく聞かれた。そこで、このような言葉の意味を探るとともに、曾祢が貧乏であったといわれるその“昔”に溯り、1920～1930年代（昭和初期、太平洋戦争前まで）を中心とした曾祢の様子を、ストレートな感情の表出しやすい「子供」という観点から見てみたい。なお、ここでいう子供とは主として5～6歳から15～16歳までの年齢を指す。

### II 御祖地区における曾祢

旧御祖村（旧小田中、小田中原山分、藤井、福田、高畠、高畠原山分、小金森、曾祢）において、曾祢は、他のマチ的な性格を持った集落に比べ、多少なりとも異質な存在であった（第1章参照）。町史によれば、<sup>1)</sup> 東往来沿いの各集落（二宮、小竹、高畠など）では、古くから小字地区名に“××マチ”という呼称が使われていたという。また、これらの集落に近い徳前（現鹿島町）では、中でも街道に最も近い区域に、“マチコウデ（町近出）”という呼称をつけた例があり、これは、街道沿いに近づくことが、すなわち、“マチ”に近づくことであるという、意識のあらわれであったとされている。このような街道沿いの集落ばかりの御祖村の中で、唯一、曾祢だけが、“ノウテ”<sup>2)</sup> の奥にある、街道から外れた集落であった。

今でこそ、家屋は徐々に増え、曾祢の人たちは、比較的家数が多く、交通の便もよい「前蔵出」のあたりを、“曾祢銀座”とよびならわすほどになった。<sup>3)</sup> しかし、曾祢の中で最も街道よりの「カワラ」に、家が5軒しかなかった頃は、そこから高畠まではずっとノウテであった。ノウテの中のまだ整備されていない一本道を、街道まで出るのは、とりわけ子供たちにとっては、大変なことであった。ところが小学校は、高畠を真中に街道を挟んだ反対側にあり（図-1参照）、

図-1 曾祢周辺略図



子供たちは、毎日そのノウテの一本道を通して、通学しなければならなかった。晴天の時には下駄あるいは家で編んでもらったわらじを履き、雨天の時には足駄を用いたが、足駄が泥で汚れてしまわないように履かずに手に持って、裸足で歩くこともよくあったという。わけでも、冬の通学路は辛い思い出として心に残っている、という人が多い。雪よけをする者は誰もおらず、1人がやっと通れるほどのノウテの中の細い雪道を、一列のかたまりとなってもくもくと歩いた。そのような体験が、曾祢の強い団結力をうみだすもとになったのだという人も、1人ではなかった。

このような曾祢の地理的位置は、子供たちにどんな影響を及ぼしたであろうか。街道沿いで“マチ”的な性格の強い高畠、小金森の子供たちは、よく曾祢が貧乏であることを、からかいの対象としたという。例えば、その一つに曾祢の共同風呂（湯番制）に関することがある。曾祢は、戦後しばらくまで、班（アタシ）単位で順番を決めて、1軒の風呂に共同で入浴する湯番制があった。年長者、男性から先に入り、1家族が平均7～8人、1班はたいてい10軒前後であったから、総勢70～80人が1つの風呂に入ることになる。おおよそ風呂場は台所の脇に独立しており、明りがほとんど届かない暗がりの中にあった。翌朝になって、風呂の中をのぞいてみると、底の方にアカが数cmたまっていたという。そして、その水は栓を抜くと便所に流れこむようになっており、畑の肥料として使用された。このような曾祢の湯番制に対して、高畠などには、早くから公衆浴

場が設けられていた。そこで、高畠や小金森の子供たちは、曾祢の子に対して、「おまえの耳の裏、見してみい。アカがたまって真黒になっとるやろ」などといってからかったらしい。また、戦前、曾祢の大根とマクワウリ（銀瓜）は、鹿島周辺では有名な特産物であった。これらは、当時、曾祢の貴重な副収入源であり、七尾まで売りに行ったり、高畠にあった沢庵加工工場まで運んだりしていた。それを見かけた他集落の子供たちは「曾祢の大根は煮ても焼いても食われんぞ。」などといってはやしたて、そこからけんかに発展する場合もあった。

また、70代の女性によれば、当時の学校に持参する弁当は、ほとんど皆が竹製の弁当箱に日の丸弁当というのが普通であったが、中にはアルマイトの弁当箱にオカズまで入れて持ってくる子もいたらしい。このアルマイトの弁当箱は周囲の羨望的であったが、その心とは裏腹に、皆で「アルマイトの弁当箱は食べ物がまずくなる」といいあって、うっぶんをはらしたりした。但し、アルマイトの弁当箱を持てるような子はごく少数派で、そんな子は通学時にもマントを羽織ってきたりしていた。ちなみに、一般的な通学時の服装は、筒袖の着物であり、防寒用には「はんちゃ」と呼ばれる袖なしの着物を着ていた。それが、1926（昭和元）年頃を境に、男子を中心として、いわゆる「制服」を着用する子供が増え始めたが、それでも防寒用の服ははんちゃが普通であった。そうした中でマントを着ることができると子供は、かなり経済的に余裕のある家の子供であると考えられ、街道沿いの集落の中でも珍しい例であったとおもわれる。

また、ある曾祢の女の子が高所から転落して意識不明の重体となり、街道沿いの病院へかつぎこんだところ、医者はどこの子かを見てとると、診察をしようとしなかったという話もある。その子の家に、診察代を支払う能力がないと判断したためであろう。その他小学校で「楽しい正月」という題の作文に「正月は年末の支払いが足りず、（残りをどう工面しようかと）親が困り果てている」といった内容のことを書いた子供もいたという。

このように、確かに曾祢に経済的余裕がなかったことは事実であるといえよう。しかし、だからといって、御祖地区の他の集落と曾祢の間に、経済的に大きな較差があったとはっきり断定することはできない。それでも、曾祢の子供たちがからかいの対象となったのは、やはり貧しさに加えて“マチ”集落の中における異質性と、当時においては大きな意味があったと思われる集落間の対抗意識があったからではないだろうか。このことは、同じ地区の中でも、特に曾祢に隣接する高畠や小金森の子供たちが曾祢の子供たちをからかったということにそれが表れているといえるだろう。団結力についても、曾祢の人々自身は、貧乏をタネにからかわれて悔しい思いを共有したことによって、曾祢の団結力は強められたというような説明を与えることが多い。だが、これまでみてきたように、これらの要素は必ずしも客観的に正確な実態を反映しているとはいえないのである。

### Ⅲ 子供たちのくらし

Ⅱでは、御祖校下においての曾祢の子供たちの立場というべきものをみてきた。ここでは、範囲を曾祢の地区内に限定し、太平洋戦争前（1920年代から1930年代、すなわち大正時代末期から昭和初期にかけて）の子供たちのくらしをくわしくみていくことにする。

#### 1. 曾祢における「子供」の位置

戦前は、一般的な傾向として、子供の教育については戦後に比してさほど重要視されていなかった。曾祢においてもあれはあてはまり、勉強をしていると家の仕事（農業）を手伝うように親から注意された（50歳代の男性）というぐらいである。また、遊んでいたら遊んでいたで、「そんなに悪さばかりしているくらいなら、山へ行って薪でも拾って来い」という具合に親に言われたという。戦前においては、曾祢の生業の主流は農業であり（第2、4章参照）、農作業では子供の労働力は無視できない存在であった。家庭内においては、親、特に男親のこととは絶対というフシがあった。親のいいつけに反すれば、お仕置きという制裁が待っているという場合が多々あった。また女子においては自分の意見など持つものではなく、ただ親の言うことを聞いておればよいとする傾向が強かった。こうした状況下においては、小学校、すなわち義務教育を終えた後で、更に進学しようという者は数えるほどしかいなかった。親の方としては、そのような経済的余裕や志向性もなく、またそれが普通であった。

小学校を卒業すれば、男子は家業の手伝いを、また次男・三男であれば関東・関西などへ上京して風呂屋・豆腐屋の修業をすることもあり、女子ならば織物業に従事することなどによって、立派に生計の手助けをすることができた。男子の場合は、所帯を持ち自分の家を持ってこそ一人前という一般的な認識はあったものの、子供は、学校を終えた時点で、きちんとした労働力を伴った一個人としてみなされたといえるだろう。このことは、後述の少年団の対象が学校を卒業するまでであり、当時はたいてい15歳ぐらいで青年団に加入したということからもうかがい知ることができる。

それでも、学校教育を受けた後でさらに勉強したいという若者が集まって、曾祢地区内で夜学校が開かれた時期もあった。しかし、夜学校は、その名が示す通り、皆が仕事を終えてから夜に開講されるものであり、やはり、当時においては、現在ほどには勉強が重視されていなかったといえる。従って、以下は子供たちのくらしぶりを仕事・遊びの2つに大別してみよう。

#### 2. 子供の仕事

まず第一に、曾祢においては、はっきりと組織的な機能を持つ少年団が活動していた。この少年団は、昭和初期において、全国的な組織の一部であったと思われ、正式名称は「少年赤十字」であったが、曾祢では一般に少年団と呼びならわされていた。参加対象は、名前の通り男の子に限られており、小学校低学年から現在の中学生にあたる高等小学校までの男子で組織されていた。曾祢の場合は、1926年頃に小学校から少年赤十字のバッジを与えられたことをき

かけに少年団が結成された。本格的な活動が始まったのは、それから2～3年経った後のことで、主な活動内容は朝の起床ラッパと晩の“火の用心”のみまわりであった。この2つの仕事は当番制で2人組になって行うようになっており、だいたい週に1度の割合で当番にあたった。また、戦前においては図に示した曾祢内部での3つの小区分のうち、「カワラ」はノウテに近いところであったので、これらの仕事は「堂の森」と「前蔵出」を中心に行われていた。その他の活動としては毎日曜日の奈鹿曾彦神社の清掃<sup>4)</sup>や、春休みや夏休みに行く山に通ずる道の除草・清掃などがあった。また、地区から少年団用に畑をもらい、そこに野菜を作って、自分たちで食べたり、余剰分は地区の大人に売ったりした。

こうした団の活動は、主に最年長者をリーダーとしてとり行われており、年功序列の厳しい世界であった。起床ラッパのメロディーも軍隊のものをそのまま真似たものであったり、行進をしたりということもあって、「小軍隊のような感じがかった」という人(60歳代の男性)もいたほどだ。しかし、リーダーには年長者であれば誰でもよいというわけではなく、やはり下級生の面倒をきちんとみられるような人がその任をまかされていた。このような小さなタテ型社会の中で、子供なりの仕事の伝統が受け継がれていき、ラッパの吹き方や薪のまとめ方・背負い方などを子供たちは覚えていった。この曾祢少年団が、実際に活発な活動を行っていたのは5～6年間のことであったが、近隣の地区よりは比較的長く続けられたらしく、少年団自体はほぼ戦後まで存続したということだ。2つの主な仕事のうち、朝のラッパの方は終戦後まもなく途絶えたようだが、夜まわりの方は活動を開始した時期が七尾・鹿島において最も早かったということで表彰を受けたこともあり、こちらは戦後しばらくの間続けられた。このような子供たちの自主的な活動に大人たちはどう関わっていたかということ、先述のように畑を与えたり、万雑から補助金を出したりと、おおかたの協力の姿勢がみられるが、活動そのものに加わるということはなかった。また、赤ん坊のいる家の近くで朝早くからラッパをふきならして家人におこられるということもあったが、おおむねは好評だったようだ。

少年団は子供たちにとっていわば地区内における公的な仕事だったわけだが、それに対して、私的な仕事、つまり家庭内での仕事はどのようなものであったのだろうか。曾祢は戦前、農業を中心とした地区であった。ゆえに子供たちは麦ふみや稲刈り、耕作作業において労働力として期待された。また、特に男の子の場合は、数人で裏山に行き、炊事・風呂用の薪を拾ってくるのがほとんど専任の仕事であった。薪拾いは3束ほど作るのにも半日はかかり、春休みや冬休み、土・日曜日などの休日に行うのが普通であった。それから、先にも述べたように曾祢の特産品である大根・マクワウリを七尾まで売りに行くこともあった。女の子の場合はよく小さい子供の子守りをさせられた。そのため、遊ぶ時にも小さい子供を背負って遊ぶ女の子の姿が見受けられた。また女の子が小学校を卒業してさらに上の学校へ進むということはまずなかったため、小学校卒業後あるいはそれ以前の小学校高学年の頃から機織りを習い始める子が多数

を占めた。

### 3. 子供の遊び

学校が終わると、学校に残って校庭などで遊ぶということはまずなく、すぐに家に戻って集落内で遊ぶのが子供たちの常であった。御祖校下の他の集落の子供たちとは滅多に遊ぶことはなく、ごく仲の良い友達が家に来て遊ぶことがたまにある程度だった。普段はやはり、曽祢の子供同士で遊ぶのが普通であった。その他に、校下以外の近隣集落との関わりをみると、下曽祢・大町の子供たちは曽祢の子供たちの格好のけんか相手であった。だが、このけんかは多少娯楽的な意味合いをふくんだものであったようだ。遊んでいるうちに人数が多くなると、誰とはなしに「おい、けんかにでも行くか」というハナシになる。そこで、相手方の地区へ大挙して押しかけていくと、それが子供たちにとっては既にけんかの始まりとなった。当然、逆に相手が攻めてくる場合もある。けんかの内容は殴り合い、取っ組み合い、果ては石を投げるなどの行為にまで及んだが、これが不思議と大怪我にまで至ることはあまりなかった。やはり、そこは娯楽的な要素による制御があったのであろうか。とはいえ、けんかに違いないから、他日、親にいつつけられた用事でけんか相手の集落を通らなければならないときは、ひどく緊張し極力相手にみつからないようにしたという。ちなみに、御祖校下の高畠や小金森の子供たちとは、先に述べたようにからかわれたことがきっかけでけんかになることはあっても、普段はあまりけんかをするとはなかった。下曽祢や大町の子らとくらべて、学校外での接触は少なかったとみえる。

次に、地区内における子供たちの関係を見てみよう。曽祢には前述の通り、3つの小区分があるが、男の場合はこの区分による遊び相手の区別というのは比較的少なかったようで、集落中の子供が集まって遊ぶことが多かった。その内容は「カイセン（＝開戦）」「陣取り」など、大人数で遊ぶのに適するもの、他には「ウンサ（鬼ごっこ）」「ポコペン（かくれんぼ）」「おこし（メンコ）」「ぶちごま（けんかごま）」などがあった。遊び場も地区内にある神社の境内であるとか、用水池の周辺など、広いスペースのある所が主であり、集落全域がその対象であった。これに対して、女の子はあまり自分の家から遠く離れて遊ぶことはせず、家の近くの空地で、かくれんぼや鬼ごっこ、縄とび、おはじきなどをして遊ぶことが多かった。これには、先に述べたように子守りをしていて遊ぶときも小さな子を背中におぶっている場合があったり、あるいは女の子が外に出すぎるのを親が好まなかったりと様々な制約があったようだ。したがって、女の子の場合は必然的にほぼ3つの小区分ごとに別れる結果となった。また、曽祢には同姓の者で構成される「マツイ」という集団があるが、マツイの子供同士で遊ぶというのは日常なことではなく、何かマツイの行事があったときなどに限られていた。他には性別があるが、男女が一緒になって遊ぶことは、ほとんどないといってよく、学校以外では口をきくことさえ滅多になかったらしい。

以上が年間を通した遊びの状況であるが、その他にも行動半径の広い男の子を中心とした様々な季節の遊びが挙げられる。夏は用水池での水泳が遊びの主役であった。これには、年齢による区別があり、小学生までは水深の浅い「みすまの池」（現在は保育所となっている。図-1参照）、背も伸び泳ぎも達者になってくると水深約2mの「堂田の池」で泳いだ。戦後、1960年前後には当番制の監視員がつけられた時期もあったが、現在では池での遊泳は禁止されている。また、曾祢の真中を貫く地獄谷川で遊んだ例も二、三聞かれたが、50歳代の男性で、川では全く遊ばなかったという人もあり、夏の遊びの中心は、より安全性の高い池の周辺であったことがうかがえる。また、少年団の宮掃除の前に、早朝の肝だめしが行われることもあった。冬には、裏山で手製の竹スキーで遊んだ。この山は薪を拾う所でもあり、時々鳥取りをする所でもあったので、とりわけ男の子たちには関わりの深い場所であった。

そして、昭和初期の子供たちにとっては大変楽しみな待ち遠しいものに祭があった。曾祢にある奈鹿曾彦神社は春と秋の年2回、大祭が催される。特に獅子舞やおみこしの出る4月19日の春の大祭は比較的華やかな方である。当時の祭の中心になるのは、青壮年団員であり、子供は獅子舞の後について神社の紋入りちょうちんを持って歩く「たかりちょうちん」を交替でやらせてもらえるぐらいであった。それに、祭になると、場所は一定しないが、必ず玩具などを売る出店がやってきて、子供たちは祭用の特別なこづかいをもらい、店に集まってきた。この年に1度の華やかな行事は、普段の遊びの中にもしばしば取り入れられた。例えば、獅子舞を真似る時は、獅子頭は下駄かそれらしきものを2つ合わせて、蚊帳は綱を輪にして代用した。曾祢流の獅子舞はわりと単純な方だったので、見様見真似でもそれらしくできたという。また少し時代を遡るが、大正時代の子供にとっては数年に1度出るか出ないかの曳山も印象深いものだったようで、これもしばしば遊びに取り入れられた。子供たちは適当に拾ってきた木の板を本体とし、木製の車を4つつけて曳山にみたて、赤っぽい木綿や小さい松の木等を飾って、より本物らしくした。それは子供1人ぐらいが上に乗ることができるほどの大きさで、このときばかりは「カワラ」「堂の森」「前蔵出」の3手に分かれて、曳山をぶつけあって遊んだという。

#### IV 考 察

現在は、昭和初期とは比べものにならないほど教育が重視されている。小学校・中学校の義務教育を終えると、ほとんどの者が、高校あるいは大学まで進学する。曾祢の場合は、高校は七尾または羽咋へ自宅から通い、大学は県外へ進出するというケースが多い。したがって、必然的に、子供の生活に学校がより深く関わるようになった。放課後あるいは日曜日に、様々なサークル活動が行われ、地区の行事にも学校（この場合は小学校）の指揮のもとに行われるものが増えてきた。また、学校以外にもピアノやそろばん・学習塾などの稽古ごとに通うこともごく一般的になっ

ている。このようにして子供たちのくらしの中で教育を受けることに使われる時間は大きな比重を占めている。いわゆる「勉強」に費やされる時間が多くなり、他のことをするヒマが削られているのである。しかしながら、「子供」である期間は、かりに「学校を卒業するまで」という昔の認識を適用したとしても、昔と比べて非常に長くなった。またその期間、子供を働き手として期待するということは、家庭内の手伝いレベルのことを除いては、ほとんど考えられない。農業以外の生業が多数を占めるようになった現在では、また、その生業の手助けを子供が行うこと自体不可能な場合も多い。ゆえに、今の子供は、将来のために教育を十分に受けておればよいのであって、現在においては何も課されるところがないのである。

こうした現在の状況においては、例えば昔の少年団と似たような組織である子供会についてみても実情は似て非なるものである。子供会の対象は小学生であるが、その運営・実行は会員である子供の親が役員会を設けて、全てをとりしきっているという状況だ。理想的にはやはり、子供による企画・運営が掲げられているものの、それはまず望むべくもない。活動内容については、日帰り旅行、最年長である6年生とのお別れ会、ラジオ体操など、その多くが子供たちのために考えられたものであり、常に役員である大人がついていなければ行事は進行していかない。日帰り旅行を例にしてみると、高学年対象の旅行については以前は一泊していたのを、付添いの親たちの負担軽減のために全学年日帰りに落ち着いたといういきさつがある。また、先にも述べたように学校がとりしきる校下内地区対抗の球技大会・卓球大会も子供会行事である。その他、運営費を得るための廃品回収や花壇の手入れをする奉仕活動があるが、これらはほとんど大人が中心となって行われている。したがって、同じ子供を対象とした組織でも、ほとんど無償で自発的な奉仕作業を活動の中心とした少年団とは、機能・目的が異なっているものである。厳密に言えば、少年団は高等小学校までを対象としたので、現在でいえば中学生がその指導にあたっていたのだが、そのことを考慮に入れても現在の子供会は少年団に比して受動的だといえよう。

このような今の子供について、大人たちに聞いてみると、「どこも皆似たようなものだ」という答えがたいてい返ってくる。それは、ファミコンやテレビを遊び道具とし、学校の他にも塾などに通うといった日本全国共通の子供像である。高等教育がほぼ全ての子供にいきわたっている今日においては、全国すみずみに至るまで均質な情報が満ちあふれ、交通の便も飛躍的に発達を遂げた。このような状況においては、子供ならずとも均質化は進む一方である。曾祢の場合、それはすなわち、“マチ”からの異質性、いいかえれば小さな地域社会の対抗関係の消失を意味した。お年寄りは今でも団結力の強さを誇りにしているフシがあるが、今の子供たちにとっては、地区ごとに区切って考えることすら思いつかないのではないだろうか。それとともに、これまでくらしの全てであった「地域」に対する意味合いが薄れていったのである。



## V お わ り に

昭和初期に子供時代を過ごしてきた人々は、現在、70～80歳代のお年寄りである。彼らは、いわば現役を退いたわけであるが、一般的に考えられるお年寄りの状況とは、多少異なっている点がある。地区の様々な年齢集団（青年団や壮年団）が衰退の一途をたどる中で、彼らが中心的存在となって活動している老人会はいまなお盛んである。彼らの地区内における発言は、かなり尊重されているのではないかと思う。それは、単に曾祢という集落がお年寄りを大切にする性格であるからか、お年寄り自身が自ら団結力が強いと言い切る昭和初期の曾祢っ子たちであるからかは、定かではない。それでも、彼らがその子供時代に培ってきた認識を現在に至るまで、いきいきと保っていることは確かであろう。

しかし、彼らが育ってきた昭和初期と、現在の子供たちを取り巻く環境とには、文字通り隔世の感がある。彼らに、現在の子供について聞いてみても、先に述べたような通り一遍の言葉しか返ってこないことからしても、自分たちとは全く別のものであると決めこんでいるフシがある。これはつまり、世代間のコミュニケーションが放棄されたともいえるのではないだろうか。彼らは、まさしく「曾祢っ子気質」と呼ぶにふさわしいものを持つ人々である。それだけに、これまでみてきたような地区に対する概念の変化と共に、曾祢っ子気質が受け継いでいかれなくなるのは、時代の流れとはいえ、残念なことだと思う。

### 注

- 1) 『鹿島町史通史・民俗編』 P.944.
- 2) “ノウテ”とは田畑だけで全く家屋のない広がりを目指す。
- 3) 以前は「堂の森」の方が曾祢の中心という感があったが、今ではすっかり「前蔵出」にとってかわられた、という昔からの経緯があり、また一説には、「前蔵出」の読み方が「マエグラデ」「マグラデ」「マムラデ」などとばらばらだったので、“曾祢銀座”という呼称に落ち着いたという人もあるが、いずれにせよ若年層の人達は“曾祢銀座”という呼び名を知っていても、「前蔵出」等の地区名の呼び分けはあまり知らない。
- 3) この活動のみ女子も参加していたが、男子が神社の前、女子は両脇と後ろという具合に、担当区域が異なっていた。